

## 「いちばんの幸せは痛みがないこと」

——アヘンと 19 世紀イギリスの詩人たち（ジョン・キーツ、  
ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ、フランシス・トムソン）——

富 樫 剛

### はじめに

詩人ジョン・キーツ（John Keats, 1795-1821）がローマで死んだのは、1821 年 2 月 23 日の夜のこと。享年 25 歳、死因は肺結核であった（Rollins 1: 224-25, 2: 94; Bate 696）。その約 40 年後、1862 年の同じく 2 月の夜、詩人・画家ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ（Dante Gabriel Rossetti, 1828-82）の妻・モデルで、みずからも詩人・画家であったエリザベス（Elizabeth Rossetti, 1829-62, 以下、旧姓のシダル Siddal であらわす）は、夫の外出中に昏睡に陥り、そのまま意識をとり戻すことなく、翌朝死ぬ（Rossetti, W. 1: 221-24; Fredeman 2: 434）。<sup>1</sup> さらにその 25 年後、1887 年の 2 月 23 日——キーツが死んだ日——雑誌『陽気なイングランド』（*Merry England*, 1883-95）編集部のポストに、ひとりの浮浪者から手紙が届く。そこに記されていたのは、ソボクレス、マルティアリスなどギリシャ・ローマの古典からダンテ、チョーサーを経てシェリーやテニソンにまで広く言及しつつ、古代の異教ではなくキリスト教に根ざす詩的美の優越を説く渾身の論考。「地獄の」ではなく「天国の獵犬」（“The Hound of Heaven”）という宗教詩に名を残す詩人・批評家フランシス・トムソン（Francis Thompson, 1859-1907）がロンドンの路地裏から世に出た瞬間であった。<sup>2</sup>

キーツ、ロセッティ、そしてトムソンの生涯・作品に共通して登場するのは、麻薬、特にアヘンである。医師・薬剤師の資格をもっていたキーツの詩には、麻酔・鎮痛効果をもつ植物がしばしば登場する（Everest; Bate 67）。ロセッティはクローラルに、シダルはアヘン溶液（*laudanum*: アヘンを蒸留水とアルコールに溶かしたもの; Berridge xix）に深く依存していた（*Macht*）。シダルの死因はこの薬の過剰摂取である。未遂に終わったが、1872 年にロセッティもこれで自殺を

はかった。トムソンは、浮浪者時代も、詩人・批評家として身を立ててからも、アヘン溶液を断つことができなかった。

このようなアヘンの使用・濫用の背後にあるのは、薬物の性質や危険性に関する知識が広まり、麻薬の製造販売が国際麻薬三条約によって世界的に管理されている現代とは大きく異なる19世紀イギリスの社会事情である。<sup>3</sup> そこでは、誰でも麻薬を薬局などで買うことができた (Berridge ch. 3)。

以下、本稿では、19世紀の詩人たち、世紀初めのキーツ、半ばのロセッティ、末のトムソンの生涯を紹介しつつ、麻薬をめぐる社会状況や制度の改革を紹介し、さらに麻薬にふれる彼らの詩を読解する。医療従事者主導でなされた薬物流通の改革と、それに関知せず日々麻薬を使用した（キーツの場合、したくてもできなかった）市井の人間である詩人たちの生きざまを並置すれば、つまり麻薬の管理をめぐる理念と現実を重ねれば、当時の社会のあり方はより立体的にとらえられるはずである。こうして等身大の19世紀イギリス社会像を提示し、さらに、その産物でありつつそれをこえて私たちの思考を刺激する詩人たちの生涯と作品を紹介できれば、と考える次第である。

## 1. 「こんな死後の生はいつまでつづくのかい？」——キーツ、「秋に」——

「こんな死後の生はいつまでつづくのかい？」——死を目前にしたキーツの有名な言葉である (Rollins 1: 224; Sharp 85; Bate 693)。<sup>4</sup> 医師の指示にしたがって詩の執筆をやめ、異国ローマである種の軟禁状態に生きるという、社会的に死んだも同然の生活をあらわすものとして、「死後の生」(“posthumous life”)とは適切な言葉であるが、同時にこれは末期の結核を病むキーツの姿を覆い隠してしまう。ローマで彼の看護をした友人ジョゼフ・セヴァーン (Joseph Severn, 1793-1879) の記すキーツの姿は、はるかに生々しく、痛々しい。それは「死後」のものなどではなく、死病におかされつつも死ぬことができずに苦しまなくてはならなかった生なのである。

彼の症状は日々悪化しています——土色の痰——しかも大量——寝汗——死

人のように胴と手足がやつれて——時折、腸の弛緩と収縮による下痢がきて——食べたものがとても早く、ほとんど消化されずに出てきます。……彼の苦しみは言葉では表現できません。

医者はあと二週間もたないだろうといっています——痰が相当たまっていて、また胴にも手足にも栄養がいません……キーツは本当に、恐ろしくなるほど心から死を望んでいます。死だけが彼の安らぎ……死について話すときは楽しそうです。

「人が死ぬのを見たことある？」——いや——「ゴメンな、セヴァーン、オレのために危険で面倒なことになって——でも、しっかりしてな、もう長くは苦しまないだろうから——じきに静かな墓に入るんだ……もう冷たい土の下にいる気がする——ヒナギクがそこに咲いててさ……」——翌朝、また生きて目覚め——どれほど痛々しく彼が悲しんだか——彼の泣き声で、ほくもはりさけそうです——。（Rollins 1: 202, 205, 224）

このような苦痛、死に対する熱望、そして「実はロンドンで毒を盛られていた」という被害妄想など、みな無理もないことであった（Rollins 1: 180-81）。死後の解剖で明かされたように、キーツは「考えられる最重度の結核」を病んでおり、「二つの肺は完全に壊れていた」からである。医者曰く、「よくこんな体でこの二か月生きてたな……」（Rollins 1: 225, 2: 94）。

手を施すことはできなかったのか。できたはずである——アヘンによって。痛みと精神的緊張を和らげるアヘンは、紀元前 4000 年頃のシュメール文明以来、医療などに用いられてきた（Berridge xxii）。キーツの生きた 19 世紀初めのイギリスでも、食料品店や薬屋など、どこでも、誰でも、アヘンを売ること、買うことができた（Berridge



図版 1 眠るキーツ、1821 年 1 月 28 日早朝 3 時。世話をしていたセヴァーンが眠気覚ましのために描いたもの。（容態の急変に備えて起きていなくてはならなかった。）

ch. 3)。実際、鎮痛・鎮静剤、睡眠薬などとして多くの人々がアヘンを使っていた。当時の文学者では、ジョンソン (Samuel Johnson, 1709-84)、コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834, 彼のアヘン中毒は有名)、ド・クインシー (Thomas de Quincey, 1785-1859, 彼の『阿片常用者の告白』 [*Confessions of an English Opium Eater*, 1821] 有名)、バイロン (George Gordon, Lord Byron, 1788-1824)、シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) などのアヘン使用が知られている (Hayter; Foxcroft ch. 3)。

キーツ自身、1820年のはじめ (おそらく、結核発症を告げる2月3日の吐血の直前の頃に)、こっそりアヘン溶液を服用しているのを友人のチャールズ・ブラウン (Charles Armitage Brown, 1786-1842) にとがめられ、「もう一滴も君に隠れて使ったりしないよ」と約束している (Brown 63-64; Bate 635)。その年の秋、療養のためローマにわたる直前に、彼はセヴァーンに頼んでアヘン溶液を購入しており (Sharp 52-53)、後日、病による苦痛のなか、その服用を求めている。みずから命を絶つために——「オレはもう死ぬんだから、今死なせてくれよ」 (Sharp 84) ——「おまえがいなけりゃとくにそれ飲んでたぜ！ 三か月前、船の上でな！ みじめに三か月も生きさせやがって！」。<sup>5</sup> すべてにおいてキーツに尽くしてきたセヴァーンは、ここでも彼に尽くしそうになるが、彼はアヘン溶液を医師に預けてしまっていた (Rollins 1: 203)。そんな会話の数週間後、1821年2月23日の夜、キーツはセヴァーンの腕のなかで死ぬ——それまでの苦痛と迷妄が嘘のように、まるで眠りにつくように、恐ろしいほど静かに (Rollins 1: 224-25, 2: 94; 図版1参照)。

\* \* \*

キーツの詩には、しばしばアヘンが登場する。「眠りに誘う麻痺が／ほくの感覚を襲う……／アヘンを飲みほしたかのように／今……」とはじまる「ナイティンゲールに歌うオード」 (“Ode to a Nightingale,” 1819, 1-4 行目: Keats, *Poems* 525, *Poems Published* 107)。「アジアのアヘン」以上の「圧倒的な液体」に「ほくは必死に抵抗する。／……しかし無駄なこと、／かすみのなかにいるようにほくは氣を失い、沈むように崩れ落ちる」と歌う『ハイピリアンの没落』 (*The Fall of*



*Hyperion*, 1819, 47-55 行目: Keats, *Poems* 660-61)。<sup>6</sup> しかし、キーツの死ともっとも共鳴する作品は、「秋に」(“To Autumn,” 1819) であると思われる。この詩は、特に女性として擬人化される「秋」がヒナゲシ（アヘンの原料であるケシと重ねられている）の香りに酔って眠る作品半ばの場面以降、死の暗示にあふれている。<sup>7</sup>

「秋に」

1.

〈秋〉——君は、霧と、甘く熟した果実の季節、  
恵みの太陽の心の友。

君は太陽とたくらむ、藁ぶき屋根の軒下をつたう  
ブドウの実を、どれくらい重く実らせようか——  
小さな家の脇、コケに覆われた木々を、どれくらい

リンゴでしならせようか—— 5

果実の芯の芯まで、どれくらい熟れさせようか——

ヒョウタンや、ヘーゼル・ナッツの殻を、どれくらいふくらませようか、  
その中の実はおいしくて——そしてどれくらい、さらに咲かせようか、  
さらにさらに咲かせようか、ハチたちのために遅咲きの花を——

するとハチたちは、あたたかい日々がずっとつづくと思ひこむだろう、 10  
夏が過ぎても、ねっとりした蜜が巣からあふれているから。

2.

収穫されたもののなかによくいる君を、見たことない人がいるだろうか？

探しに行けば、君は必ず見つかる。

たとえば、納屋の床に何気なくすわって、

もみがらを飛ばす風に、やさしく髪をなびかせていたり。 15

畑の列の途中で眠りこけていたり。

ケシの香りに酔ってしまい、鎌の次のひと振りで、

作物を、からみつく花ごと刈りとることも忘れて。

またあるときには、落穂拾いをする人のように、

頭にのせた作物をささえつつ小川をわたっていたり。 20

あるいは、リングしぼりのところで、辛抱強く、  
何時間も何時間も、最後までリングがしぼられるのを見ていたり。

3.

〈春〉の歌はどこにある？ そう、それはどこへ行った？

いや、忘れよう。君には君の音楽がある。

雲を通る夕日の筋が、静かに死にゆく一日に花を添え、 25

刈り株の広がる畑をバラ色に染める。

そんなとき、小さなブユの悲しげな合唱団が、歌い、嘆く――

川辺の柳のあいだで、高く飛び、

あるいは低く沈みつつ――穏やかな風が生まれ、死ぬのにあわせて。

丸々育った子羊の大きな鳴き声が丘のほうから聞こえ、 30

垣根の下でコオロギが歌う。今、やさしい高音にのって

コマドリの口笛が庭の畑から聞こえてくる。

空に集うツバメも軽やかに鳴いている。

“To Autumn”

1.

Season of mists and mellow fruitfulness,

Close bosom-friend of the maturing sun;

Conspiring with him how to load and bless

With fruit the vines that round the thatch-eves run;

To bend with apples the moss'd cottage-trees, 5

And fill all fruit with ripeness to the core;

To swell the gourd, and plump the hazel shells

With a sweet kernel; to set budding more,

And still more, later flowers for the bees,

Until they think warm days will never cease, 10  
For Summer has o'er-brimm'd their clammy cells.

2.

Who hath not seen thee oft amid thy store?  
Sometimes whoever seeks abroad may find  
Thee sitting careless on a granary floor,  
Thy hair soft-lifted by the winnowing wind; 15  
Or on a half-reap'd furrow sound asleep,  
Drows'd with the fume of poppies, while thy hook  
Spares the next swath and all its twined flowers:  
And sometimes like a gleaner thou dost keep  
Steady thy laden head across a brook; 20  
Or by a cyder-press, with patient look,  
Thou watchest the last oozyngs hours by hours.

3.

Where are the songs of Spring? Ay, where are they?  
Think not of them, thou hast thy music too,---  
While barred clouds bloom the soft-dying day, 25  
And touch the stubble-plains with rosy hue;  
Then in a wailful choir the small gnats mourn  
Among the river shallows, borne aloft  
Or sinking as the light wind lives or dies;  
And full-grown lambs loud bleat from hilly bourn; 30  
Hedge-crickets sing; and now with treble soft  
The red-breast whistles from a garden-croft;  
And gathering swallows twitter in the skies.  
(Keats, *Poems Published* 137-39)



図版2 大鎌を持った死神がお迎えに。



図版3 ニコラ・プーサン「秋」のレプリカ。

において、頭にかごをのせて川の前に立っている女性は何を見ているのか(図版3-4)。実際に川の前立ってみよう。あるいは、そんな想像をしてみよう。目に入るのは水の流れ、想起されるのは時の流れ、人生の流れ——そしてその先にある死——ではないか。次に〈秋〉は、リンゴ搾りを見守る。あえて記されているように、「最後まで」(21-22行目)。

第3スタンザでは、「雲を通る夕日の筋が、静かに死にゆく一日に花を添え」る(25行目)。これはヤコブのはしご(創世記28:12, 図版5)、この世と天をつなぐ光のはしごのことである。夕日でバラ色に染まる畑の刈り株(26行目)は、ふたたび死神の鎌で刈りとられる人間を想起させる。バラの色が血の色でもあること、「刈り株」(“stubble”)が聖書において死んだ(殺された)人間の比喩の定番であることも思い出そう——「あなた〔神〕は怒りを送り、彼ら〔エジプト人〕

第2スタンザ、花もろとも作物を刈り取る(“reap”)〈秋〉のイメージは、「冷酷な刈り人」(“Grim Reaper”)、つまり〈死〉を、無言のうちに、しかし必然的に連想させる(図版2)(このイメージは、後述のトムソンの「ケシ」にも登場する)。刈りとりを半ばで中断して眠る、ということは、いわば死の執行が猶予されている状態である。

フランスの画家ニコラ・プーサン(Nicholas Poussin, 1594-1665)の「秋」(1660-64)あるいは類似する絵からヒントを得たともいわれる、〈秋〉が「頭にのせた作物をささえつつ小川をわたる描写(19-20行目)は何を意味するか(Jack 237-38)。<sup>8</sup> プーサンの絵



図版4 プーサン「秋」のレプリカ(部分)。

を刈り株のように焼き尽くした（出エジプト記 15: 7）——「彼ら〔占星術師ら〕は刈り株のようになるであろう。彼らは炎によって焼かれ、逃れられない」（イザヤ書 47: 14）。<sup>9</sup>

30 行目、「丸々育った子羊」も重要なイメージである。丸々太った子羊はどうか。もちろん死ぬ。殺され、焼かれ、食べられる。収穫された他の作物と同様である。また、「完全に育った子羊たち」（“full-grown lambs”）という

表現が、いわゆる撞着語法（oxymoron）、矛盾する語を結合させたものであることにも注意しよう。完全に育った子羊は、すでに「子」羊ではなく羊（sheep）である。が、なぜここではあえて「子羊」なのか。もちろん、それがいけにえのイメージの定番だからである——「神の子羊」、人々の救済のために死んだイエス・キリストとして、あるいはエジプトにとらわれていたイスラエル人を救った「過越（すぎこし）の獣」（出エジプト記 12）として。そのように遠からぬ死を暗示する子羊たちの大きな鳴き声が、秋の夕方の景色のなかに鳴りひびく。<sup>10</sup>

31-32 行目のコオロギ、コマドリの歌はどうだろう。コオロギは晩夏から初秋、コマドリは晩秋から初冬に目立つという事実もあるが、それよりもキーツが敬愛したシェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）を読み直そう。『マクベス』（*Macbeth*, 1603）2 幕 2 場のマクベス夫人は、夫がダンカンを殺しているちょうどその頃に、中庭でコオロギの声を聞いている。『シンベリン』（*Cymbeline*, 1611）4 幕 2 場では、アーヴィラガスが死んだ（仮死の）イノーゲン／イモーゲンに、コマドリが君のお墓を花で飾るよ、と歌う。最終行、空に集うツバメが描かれる理由は、渡り鳥として冬の前に去る、すぐにいなくなる、という点に尽きる。以上のような死の象徴の連続であることを意識して、第 3 スタンザをもう一度読んでみよう。

〈春〉の歌はどこにある？ そう、それはどこへ行った？

いや、忘れよう。君には君の音楽がある。

雲を通る夕日の筋が、静かに死にゆく一日に花を添え、



図版 5 “Barred Clouds” = 光の筋によってしま模様のついた雲（OED, “barred” 3 参照）。

刈り株の広がる畑をバラ色に染める。  
そんなとき、小さなブユの悲しげな合唱団が、歌い、嘆く——  
川辺の柳のあいだで、高く飛び、  
あるいは低く沈みつ——穏やかな風が生まれ、死ぬのにあわせて。  
丸々育った子羊の大きな鳴き声が丘のほうから聞こえ、  
垣根の下でコオロギが歌う。今、やさしい高音にのって  
コマドリの口笛が庭の畑から聞こえてくる。  
空に集うツバメも軽やかに鳴いている。

この詩はキーツの作品のなかで、あるいはイギリス詩のなかで、もっとも完璧で整った作品といわれることがあるが、本当にそうか（Jack 242; Bloom 20-21; Keats, *Poems* 650, *Complete* 699）。コオロギが歌い、コマドリが口笛を吹き、ツバメがさえずるという終わり方にも足りなさはないか。三スタンザ構造で起承転結の結が欠ける感はないか。<sup>11</sup>

上に見たように、この詩の最大の特徴は、端正な構成ではなく、また視覚的・聴覚的な豊かさでもなく、むしろ執拗なまでの死の暗示にある。「静かに死にゆく一日」（25行目）、「穏やかな風が生まれ、死ぬ」（29行目）など、直接提示される「死」（“die”）ということばを糸口に、実りと収穫、夕暮れ、穏やかな景色以上のものの存在に注意すれば、後半、この詩が一貫して死を歌っていることに気づくはずである。しかも、常に間接的に、秋を描く言葉の裏で。こうしてこの詩は、穏やかな秋の情景を見つめる穏やかなまなざしの背後にある死に対する強い意識を、切ないまでに繊細に、しかし鮮明に伝える。タイトルが示す通り、これは秋、つまり冬を待つ季節、つまり死を待つ時間、の詩なのである。

最後に、少しだけ、キーツ自身が死を待った時間、彼の「死後の生」のありさまを、思い出しておこう。<sup>12</sup>

## 2. 「いちばんの幸せは痛みがないこと」——ロセッティ、「秋の歌」——

秋に関連して、次にダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの「秋の歌」（“Autumn

Song,” 1848) を紹介する。

「秋の歌」

わかりますよね、木の葉がおちるのを見ると、  
どれほど心にけだるさと悲しみを感じるか、  
まるでそれらを身にまとっているように。  
いかに眠りが美しく感じられることか、  
秋に木の葉がおちるのを見ると。

頭のなかの早い鼓動が  
いかに遅くなることか、無意味ですから、  
秋に木の葉がおちるのを見ると、  
わかりますよね？ いちばんの  
幸せは痛みがないこと、と思ってしまうと。

わかりますよね、木の葉がおちるのを見ると、  
いかに魂が、乾いた麦わらのように  
根こそぎ刈られて縛られる気がするか、  
どれほど死が素敵なことに思われるか、  
秋に木の葉がおちるのを見ると。

“Autumn Song”

Know'st thou not at the fall of the leaf  
How the heart feels a languid grief  
Laid on it for a covering,  
And how sleep seems a goodly thing  
In autumn at the fall of the leaf?

And how the swift beat of the brain  
Falters because it is in vain  
In autumn at the fall of the leaf,  
Knowest thou not? and how the chief  
Of joys seems not to suffer pain.

Know'st thou not at the fall of the leaf  
How the soul feels like a dried sheaf  
Bound up at length for harvesting,  
And how death seems a comely thing  
In autumn at the fall of the leaf?  
(Rossetti, D., "Autumn")<sup>13</sup>

この静かで、もの悲しく、投げやりで、ナルシスティックに妖しい不思議な詩が書かれた 1848 年は、ロセッティにとって大きな転機、飛躍の年であった。<sup>14</sup> この年に、彼はロイヤル・アカデミーからドロップ・アウトし、伝統的・因襲的な絵画のあり方を批判する芸術家集団ラファエル前派の中心人物として活動をはじめ。若い頃の彼は、早熟で知的で、詩と絵画の才に満ち、きわめて活動的で愛嬌があり、みずからは否定していたが、自然に人を惹きつける生まれながらのリーダーであった。「秋の歌」を母に書いて送った手紙の彼のコメントからも、そんな彼のようすがうかがわれる——「泣き叫ぶような歌を載せておくね。昨日ぼくが書いたんだ。どれだけ涙を流し苦悶していたか、見ればわかるよ。ついだけでなく、もし偽りの装いを身にまとうことがインチキなら、この世でいちばんのインチキは詩だね」(Fredeman 1: 72-73)。

「秋の歌」の独特な雰囲気背景にあるのは、アヘンである。これを書いた 20 歳のロセッティはまだ麻薬に溺れておらず、また彼が後年溺れたのはクロールであるが、この詩で歌われるもの憂さ、脈の弱まり、痛覚の麻痺などは、みなアヘンの作用として知られたものであった。

2662. アヘンおよびその調合剤、アヘン溶液など——……〈症状〉めまい、



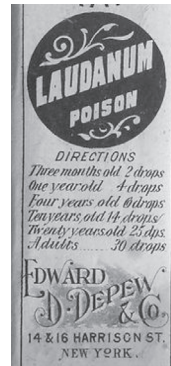
昏迷、意識の喪失。……脈は早くて弱く、呼吸も早い。……しばらくすると症状が変わる。完全に意識と感覚を失い、呼吸は遅く、いびきをかく。……肌は冷たく、脈は強く、遅い。(Beeton 1086)

キーツも、「麻痺した感覚・思考に捧げるオード」(“Ode to Indolence,” 1819) で「夏のようにあたたかい麻痺のなか、幸せをもたらす雲が／ぼくの中から感覚を奪う。脈はどんどん弱くなる。痛みには棘がなく、楽しみの花冠には花がない」(16-17 行目、Keats, *Poems* 542, *Complete* 350) と歌っているが、そのように身体的にも道徳的に危うい、しかし虚ろにも心地よい時間を、ロセッティの「秋の歌」は描き出す。形式的にも、「木の葉がおちるのを見ると」(“at the fall of the leaf”) というリフレインが、第 1, 第 3 スタンザの最終行に執拗に戻ってくることにより、また第 2 スタンザのややおかしい場所に入っていることにより、昏迷して単調になった思考と、木の葉がおちるという情景に固着してバランスを失いつつある精神状態が、あらわされているかのようである。

同じ秋であっても、キーツと違い、ロセッティはおちる木の葉のみに注目し、そのもの寂しい雰囲気や暗示される死について歌う。そして、そこにアヘンへの言及を織りこみ、けだるく、不健全で、しかし、どこかはかなく美しいと感じられないこともない、そんな絶妙な空気をつくり出しているのである。

\* \* \*

あらためてアヘン、特にもっとも普及していたその調合剤、アヘン溶液(図版 6)のもたらす諸作用と、それが 19 世紀イギリスにもたらしていた社会問題を概観しよう。まず注目すべきは、それが生後間もない乳児にも与えられたことである。1808 年の医学誌の報告によれば、一般的に乳母たちは、ゴドフリー・シロップ (Godfrey's Cordial) などという、水や糖蜜などで薄め、味つけされたアヘン溶液を常備しており、むずがる子、病気が



図版 6  
アヘン溶液  
のラベル。  
19 世紀末の  
アメリカの  
もの。生後  
3 か月の子  
には 2 滴、  
1 歳児には  
4 滴……。

ちな子に飲ませて眠らせ、そしてみずからの睡眠を確保していた (Clarke 272)。この状況は世紀半ばでも変わらず、関係するのは乳母たちだけではなかった。1845 年、上院での報告によれば、ノッティンガムの「最貧層の母親たちは、当たり前のようにゴドフリー・シロップやアヘン溶液を子どもに与えている。仕事中、静かにさせるためである」。この議会で報告された雑誌記事には次のようにある。

またゴドフリー・シロップ！先週水曜、スワン氏は……生後 17 週のミラ・ニュートンの検死をおこなった。この子には、誕生直後から静かにするよう「子ども用混合シロップ」が習慣的に与えられていた。検死前週の土曜の夜に飲んだこの薬が強すぎたため、この子は痙攣をおこし、日曜朝 8 時から 9 時のあいだに死亡した。(Report 108-9)

大人もアヘンを使用した。薬としてである。<sup>15</sup> 薬屋をはじめ、市場やパブや通りの屋台で買うことができたアヘンは、風邪や咳、頭痛、腹痛、下痢、リウマチ、痛風、飲みすぎ、疲労、うつ、不眠、更年期症状など、実にさまざまな症状に用いられた。使用する人の数についても記録がある。製造業の盛んな地域のある町では、毎日 200 人から 300 人がアヘンを買っていた。人口 12,000 人から 13,000 人の町に 6 軒あった薬屋のうちのひとつでは、ひと月に 292 人（一日につき 9-10 人）がアヘンを買いにきたという (Berridge ch. 3)。

ロセッティのモデル・妻のシダルも、そんなアヘン常用者のひとりであった。病気がちであった彼女は、「アヘン溶液がなければ眠れなかったし、食事でもできなかった」が、彼女の病気が何か、実は誰にもわかっていなかった。ロセッティの弟ウィリアム (William Michael Rossetti 1829-1919) は、「自分が思うに」とことわりつつ結核と神経痛をあげているが、「結核では目に見えるほどやつれてはいなかった」とも記す (Rossetti, W. 1: 220-21)。<sup>16</sup> ある医師は脊椎の湾曲と診断し、別の医師は精神的なストレスが原因と考えた。入院をすすめる友人がいる一方で、医者へのひとり (上の後者) は「肺の疾患は、あってもほんの少し」、「必要以上に心配しすぎ」ともいていた (Fredeman 1: 334, 347-49, 2: 42, 52; Marsh 62)。親しかった友人がですら、シダルの死後、こうしている——「特定の病気もないの

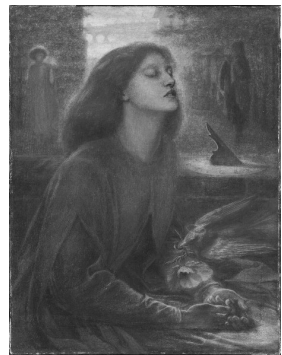
に、どうしてあんなに苦しんでいたのかしら？」(Marsh 63)。<sup>17</sup>

1862 年 2 月 10 日の夜、ロセッティとシダルは、詩人スウィンバーン (Algernon Charles Swinburne, 1837-1909) と食事に出かけ、20 時に帰宅した。その後、ロセッティはふたたび外出し、「どこか興奮しているようすだった」シダルは、就寝……するはずだったが、ロセッティが 23 時 30 分頃に帰宅したとき、彼女は完全に意識を失い、いびきをかいていた。ベッドの脇のテーブルには、空になったアヘン溶液の小瓶があった (Rossetti, W. 1: 221-24)。

検死の結果はアヘンの誤服用による「不慮の死」であったが、現在、これを自殺と考える者が多い。<sup>18</sup> 結婚まで長く待たされ、また結婚以前から浮気がちであったロセッティに精神的に追いつめられ、しかも流産を経験し……というシナリオである。決定的な証拠がない以上、無駄な詮索や不用意な断言は避けるが、ひとつだけ指摘したい。19 世紀当時、アヘンは自殺の道具であると同時に、飲みすぎに効く薬とも考えられていた。アヘン溶液がバブで売られ、またアルコール中毒による精神錯乱 (delirium tremens) の治療に使用されたのは、このためである (Jackson; “Case”; Combe 81; Inman 429; Berridge 33-34, 80)。シダルの死は、天才的かつ退廃的な詩人・画家ロセッティの美しき妻の悲劇的な結末であったかもしれない。酔いをさますつもりでアヘン溶液を飲みすぎた、という味気なくも悲しい事故だったのかもしれない。<sup>19</sup>

いずれにせよ、彼女の死はロセッティに一生立ち直れないほどのダメージを与えた。<sup>20</sup> 彼女の亡霊を見る、降霊術で彼女を呼び出す、眠れない、クロールを常用する、自殺をはかる、壁のなかに隠れた敵に襲われるという強迫観念にとり憑かれる、など、その後の彼は、精神のバランスを完全に失っていく (Fredeman 5: 407-60)。

そんな破局に向かいつつある時期に描かれた「至福のベアトリーチェ」(“Beata Beatrix,” 1864-70) を見ておこう (図版 7)。名前が重なることもあり (本名は Gabriel Charles Dante Rossetti: 「ダンテ」をファースト・ネームにしたのはロセッテ



図版 7 D・G・ロセッティ「至福のベアトリーチェ」。



図版8 ロセッティ「至福のベアトリーチェ」(部分)。光輪のある赤い鳥が白いケシをくわえている。

イ自身)、ロセッティはみずからをイタリアの詩人ダンテ、シダルをダンテの愛したベアトリーチェとする絵を数点描いているが、この絵もそんなひとつである。描かれているのはシダル=ベアトリーチェの死(昇天)の瞬間であり、今、彼女は、心の目で天国における新しい生を見ている。背景右には残されたダンテ、左には天に導くエロス(キューピッド)と生命の木。シダル=ベアトリーチェの横には、彼女の死の時刻を示す日時計。そして、光輪

をもつ不思議な赤い鳥が、白い花を彼女の胸に(図版8)。ケシである。これは当然、シダルの死因、アヘン溶液を暗示する。聖霊としての白い鳩ではなく、赤いヒナゲシ(図版9)の色の鳥が、眠りと死をもたらす(アヘン用の白い)ケシの花を運んでいるのである。

おぼろげに、はかなげに輝くこのしなやかな白いケシ、それから、天に昇るシダル=ベアトリーチェのさりげなくも美しい姿勢と表情を鑑賞しよう。そして、少しだけ、実際にロセッティが目にしたシダルの最期を思い浮かべてみよう。アヘンで完全に意識を失ったシダル。胃を洗浄するために流しこまれ、強いアヘン臭とともに吐き出された大量の水にまみれて横たわるシダルを……(Rossetti, W. I: 223-24)。「至福のベアトリーチェ」は、ロセッティにとって、いわばシダルの遺影のようなものなのである。<sup>21</sup>



図版9 野に咲くヒナゲシ("field poppy")。アヘン用のケシは"opium poppy"と呼ばれる別種。

### 3. 「ぼくの枯れた、枯れた夢」——トムソン、「ケシ(モニカに)」——

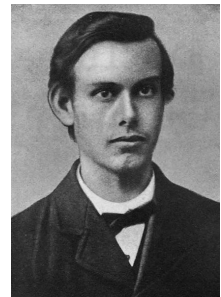
アヘン(やその他の麻薬)による不慮の、あるいは故意の、死を防ぐにはどうすればよいか。アヘンの流通を、医師や資格をもつ薬剤師が管理すればいい——こ

のような考えによって設立されたのが、現在の王立薬剤師会（Royal Pharmaceutical Society, 2010-）および英国薬剤師理事会（General Pharmaceutical Council, 2010-）の前身である英国薬剤師会（Pharmaceutical Society, 1841-2010, 1988 年から「王立」Royal が名称に付された）や、英国医事委員会（General Medical Council, 1858-）など、薬事・医療を統制する機関である。これらが、医療や、アヘンなどの薬物・毒物の取り扱いを有資格者にかぎるべく動き出した。また 1860 年代には、政治主導の公衆衛生運動のなか、アヘンの過剰摂取が問題としてとりあげられるようになり、「毒性の強い薬物をろうそく屋、八百屋、油売り、布地屋、雑貨屋が販売することは厳しく取り締まるべき」という提案がなされるようになった。そのような背景のなか、1868 年、薬局法（Pharmacy Act）が成立する（Berridge ch. 10; “Professor” 183）。

しかし、この法によるアヘンの流通の管理は特に厳しいものではなく、容器に「毒」という明記が必要となっただけであった。世の中、難しいものである。この法の成立までの議論において、アヘンの売り上げの減少を危惧する薬剤師と、その誤用・濫用を防ぎたい医師・政治家が対立した。また、アヘンの流通を厳しく取り締まったときにもっとも困るのは、安価な常備薬としてこれに頼ってきた貧しい人々である、という大きな問題もあった。法によるアヘンの厳格な管理は、不可能とはいわないまでも、かなり困難だったのである（Berridge ch. 10）。

施行後の記録から見て、薬局法は一長一短であった。麻薬による死者のうち、1 歳以下の乳児の数は、1868 年の 46 から 1869 年には 30 に、1870 年には 24 へと減少し、1880 年代には 10-20 へとさらに減少した。逆に、麻薬による 20 代以上の死者数は増加した（Berridge ch. 10, 276）。特に分析はしないが、母親や乳母のあいだにゴドフリー・シロップやアヘン溶液などの危険性がそれなりに浸透し、子どもへの投与が減ったかわりに、「毒」と承知しつつこれを服用する大人が増えたということか。

そんな 1880 年代半ばのロンドンに、やはりアヘンに溺れたひとりの浮浪者がいた。後の詩人・批評家フランシス・トムソンである（図版 10）。医師の子として生まれた彼は、まず聖職者を志すが、その道は放棄する。こ



図版 10 フランシス・トムソン（19 歳、アヘンに手を出す直前）。

の最初の学校で、彼は、成績は優秀ながらも（英語とラテン語でトップ、数学で最下位）「生まれつきの無気力[“indolence”]」を指摘されている。<sup>22</sup>次に医師を目指して別の学校に通うが、解剖の実習のため、試験のため、といって父からせしめた金でクリケットのバットやアヘン溶液を買うなど、見事に堕ちていく。資格試験を三度受けるが、当然三度とも失敗し、この道も断念する。その後いくつかの職に就くが長つづきせず、（伝えられるところによれば）父が仕事で使うアヘン溶液をくすねて飲むまでになり、彼は追い出されるようにロンドンに出た（Walsh chs. 1-2; Meynell ch. 3）。<sup>23</sup>

トムソンのアヘン常習は、筋金入りであった。手を染めたのは20歳の頃（Walsh ch. 2; Meynell 46）。1888年に『陽気なイングランド』編集者のウィルフレッド・メイネル（Wilfrid Meynell, 1852-1948, 詩人アリス・メイネル Alice Meynell, 1847-1922の夫）に拾われて入院させられ、また西サセックスの修道院に送られるなどして、しばらく薬から足を洗うが、1892年にまた手を出しはじめる。保護者ようになっていたメイネル夫妻は、彼をウェールズの修道院に送り、再度アヘン断ちに成功。しかし、詩人・批評家としての成功（1893年の『詩集』*Poems*の高評価・商業的成功）と挫折（1897年の『新作詩集』*New Poems*の失敗）、結婚を目前にしての破局を経た1900年、トムソンはアヘン常習の道へと舞い戻る（Walsh chs. 4-9）。この頃、彼はいていた、「いつも感じていた、ぼくの人生はふりだしに戻って終わると。つまり、悲劇として……どん底から文学の世界にきたから、やはりどん底に帰らないと」（Walsh 179-80）。<sup>24</sup>

といいつつ、彼は浮浪者の生活には戻らず、アヘン溶液を飲みながら文芸誌のためにひたすら書評やエッセイを書いた。その数、1901-4年に約250本。生涯通算では500-600本前後にもなる（Walsh 183, 185, 277）。<sup>25</sup>1905年以降、仕事の量が落ち（質は落ちていない）、アヘンの量が増え、ぼんやりすることも増え、逆に道端で大声でひとり言をいうようにもなり……そして1907年9月に最後のエッセイ、トマス・ブラウン（Thomas Browne, 1605-82）著作集新版の書評を書き終えた後、精根尽きたかのようにトムソンは完全なアヘン漬けとなり、無感覚



図版 11 1907年、死の  
ひと月ほど前のトムソン。

のまま、ただ時間を過ごすのみとなる (Walsh chs. 9-10)。

心配したメイネルたちが彼を病院に送るが、二か月後に彼は死ぬ。47 歳であった (図版 11)。死因はキーツと同じ結核で、肺がひとつしか機能していなかったという。が、キーツとは違い、アヘンが効きっぱなしの状態だったからか、入院前後を通じて結核の諸症状、咳、吐血、呼吸困難などはなかった。また、これらにともなう苦痛もなかった (Walsh ch. 10ff.)。<sup>26</sup>

\* \* \*

死の少し前、トムソンの病室を訪れたある人は、彼がこうつぶやくのを聞いたという——「ぼくの枯れた、枯れた夢……」(Walsh 216)。これは、最初の詩集に収められた彼の詩、「ケシ (モニカに)」(“The Poppy: To Monica,” 1893) の最終行である。1891 年夏、トムソンがメイネル一家とフリストンに行ったある日、彼らの子のひとり、トムソンお気に入りのモニカは、彼にヒナゲシの花をとって渡した。「捨てたらダメだから」といいながら (Meynell 340-41; Walsh 113-14)。このできごとから錯綜しつつ広がる連想を記した、いろんな点で不器用ながらも印象的なこの詩を最後に紹介する。(キーツの「秋に」と同様、作品中、ヒナゲシとアヘン用のケシが混同されていることに、まず注意されたい。)

「ケシ (モニカに)」

夏が裸の大地の胸にキスすると、  
その跡が赤いケシになる。  
燃えるあくびのように、ケシは草のなかに生え、  
風にあおがれてふくらみ、炎のようにゆれる。

ライオンのような赤く燃える口で、ケシは  
太陽の血を飲み干す。太陽は死んで沈む。  
東の空にワインが流れると、  
ケシは、花のカップを輝く深紅に浸す。



やがて激しいまでの幸せに、ケシは力を失い、  
疲れはてたジプシーのように熱くなり、  
荒々しくも眠たげにまどろむ。  
焼き焦がすキスを求め、くちびるをつき出して。

10

女の子が男と歩いていた。肩をならべ、  
夕暮れの端のところを。  
つないだ手と手のあいだに  
20年の枯れた月日があったが、二人は気づいていなかった。

15

豊かな南国風の黒髪をゆらし、女の子が脇を見ると、  
そこには、眠るジプシーのようなケシの実があった。  
そして、子どもらしい思いつきでこれをすばやく折ってとり、  
彼にわたした。こういいながら——「死ぬまで大事にして！」

20

水浴びからあがるニンフたちのように、  
彼のほほえみが、ふるえながら涙の海から立ちあがった。  
そしてよろこびが、沖の海にゆられるカモメのように、  
とまどう彼の心の波にゆれた。

それは彼が知っていたから。彼女の知らないことを。  
みずからの熱で火がついたかのように、  
端からしおれたケシの実のなかに、まだ火がくすぶっていることを。

25

そして彼は気づく、手と手のあいだにある  
20年の枯れた日々に。  
花ではなく、しおれた20年の日々。

30

「はじめてだ、」  
彼は心に小さくつぶやく、「眠りの



花が目ざめを、  
忘却の花が記憶をもたらししたのは。」

「はじめでだ、  
足が赤くなるほど長いあいだケシに浸ってきているのに。」  
そして彼は心に、さらに小さくつぶやく、  
「ねえ、モニカ、ぼくは人を愛する。愛するし、愛を知っているから。」

35

「君は人を愛していないし、まだまったく知らない、  
〈愛の神〉の宮殿にはいろんな部屋があることを。  
早起きな人もいるが、ずっといる人はほとんどいないということ。  
みんなかなり違うニュアンスで聞き、理解するということも、  
聖霊のように降ってくる〈愛の神〉のことばを。」

40

「君はまだ恋人と友だちの違いを知らない。  
人が話すようなぼくと、本当のぼくの違いも知らない。  
本当にぼくにぴったりのプレゼントなんだ、  
君がくれた、この枯れた夢の花は。」

45

「ねえ、素直で移り気で、移り気だけど嘘のない君、  
月日が経ったら、君はどうなる？  
君は誰を、どんなかたちで、好きになる？  
ねえ、素直で移り気で、移り気だけど嘘のない君？」

50

「ぼくを愛してくれたね、生まれてから死ぬまで、三回分  
——つまり、この三日間。  
そんな気持ちは、ぼくの顔が見えなくなったら消えるはず。  
でも、ぼくには、どこに行っても君の顔が見える。  
ぼくが裏切らないように見張ってるんだ。」

55

「ぼくは、ね、君の恋人のただの代理。  
何年か経ったら、  
君はぼくの前から消えて、誰かのところに行く。  
でも、ぼくは育ての母のように君のことを知ってる。そして愛してる。」

「だから、素直で移り気で、移り気だけど嘘のない君！ 60  
短い一生のあいだ、ぼくは君がくれた  
このプレゼントをとっておくよ。たぶん、ぼくに  
ぴったりの、この夢のつまった、枯れた花を。」

\* \* \* \* \*

眠りの花は小麦畑で頭をゆらす。  
夢がつまって重い頭を。小麦にパンがつまっているように。 65  
実った小麦、陽に赤く染まる眠りの花、  
ともに刈られる。そして刈った人も〈時間〉に刈られる。

ぼくも人々のなか、無用な頭を垂れる。  
ぼくが生むのは夢。小麦がパンを生むように。  
育った人々、陽に焦げた眠りの花、 70  
ともに〈時間〉に刈られる。でも、その後で  
誰かが集めてくれたら。眠りの花のように眠るぼくが残したものを！

ねえ、かわいいモニカ、君のくれた枯れた夢の花は、  
詩の本のなか、ずっと残る。  
詩の隅に閉じこめられて、守られて。 75  
刈り取る人からも、人を刈り取る〈時間〉からも。

かわいいモニカ、ぼくは時間の爪につかまる。  
でも、詩の本のなかに残る、

認めてもらえたほくの一部が。

ほくの枯れた、枯れた夢が。

80

“The Poppy: To Monica”

Summer set lip to earth's bosom bare,  
And left the flushed print in a poppy there:  
Like a yawn of fire from the grass it came,  
And the fanning wind puffed it to flapping flame.

With burnt mouth red like a lion's it drank  
The blood of the sun as he slaughtered sank,  
And dipped its cup in the purpate shine  
When the eastern conduits ran with wine.

5

Till it grew lethargied with fierce bliss,  
And hot as a swinked gipsy is,  
And drowsed in sleepy savageries,  
With mouth wide a-pout for a sultry kiss.

10

A child and man paced side by side,  
Treading the skirts of eventide;  
But between the clasp of his hand and hers  
Lay, felt not, twenty withered years.

15

She turned, with the rout of her dusk South hair,  
And saw the sleeping gipsy there;  
And snatched and snapped it in swift child's whim,  
With--- “Keep it, long as you live!” ---to him.

20

And his smile, as nymphs from their laving meres,  
Trembled up from a bath of tears;  
And joy, like a mew sea-rocked apart,  
Tossed on the wave of his troubled heart.

For *he* saw what she did not see, 25  
That---as kindled by its own fervency---  
The verge shrivelled inward smoulderingly:

And suddenly 'twixt his hand and hers  
He knew the twenty withered years---  
No flower, but twenty shrivelled years. 30

“Was never such thing until this hour,”  
Low to his heart he said; “the flower  
Of sleep brings wakening to me,  
And of oblivion memory.”

“Was never this thing to me,” he said, 35  
“Though with bruised poppies my feet are red!”  
And again to his own heart very low:  
“O child! I love, for I love and know;

“But you, who love nor know at all  
The diverse chambers in Love’s guest-hall, 40  
Where some rise early, few sit long:  
In how differing accents hear the throng  
His great Pentecostal tongue;

“Who know not love from amity,

Nor my reported self from me; 45  
A fair fit gift is this, meseems,  
You give---this withering flower of dreams.

“O frankly fickle, and fickle true,  
Do you know what the days will do to you?  
To your Love and you what the days will do, 50  
O frankly fickle, and fickle true?

“You have loved me, Fair, three lives---or days:  
'Twill pass with the passing of my face.  
But where *I* go, your face goes too,  
To watch lest I play false to you. 55

“I am but, my sweet, your foster-lover,  
Knowing well when certain years are over  
You vanish from me to another;  
Yet I know, and love, like the foster-mother.

“So, frankly fickle, and fickle true! 60  
For my brief life-while I take from you  
This token, fair and fit, meseems,  
For me---this withering flower of dreams.”

\* \* \* \* \*

The sleep-flower sways in the wheat its head,  
Heavy with dreams, as that with bread: 65  
The goodly grain and the sun-flushed sleeper  
The reaper reaps, and Time the reaper.

I hang 'mid men my needless head,  
And my fruit is dreams, as theirs is bread:  
The goodly men and the sun-hazed sleeper  
Time shall reap, but after the reaper  
The world shall glean of me, me the sleeper!

70

Love, love! your flower of withered dream  
In leavèd rhyme lies safe, I deem,  
Sheltered and shut in a nook of rhyme,  
From the reaper man, and his reaper Time.

75

Love! I fall into the claws of Time:  
But lasts within a leavèd rhyme  
All that the world of me esteems---  
My withered dreams, my withered dreams.  
(Thompson, *Poems* 75-78)

80



図版 12 ケシの実。

冒頭の三スタンザは、ケシの花が咲き、枯れ、実になる過程の描写である。シェリーなどとともにクラショー (Richard Crashaw, c. 1613-49) ら 17 世紀の詩人を好んだトムソンらしくもある、乱暴で不格好な比喩である。ケシは散った後に緑の実をつけ (図版 12)、それは枯れてジブシーの肌のような褐色になる (図版 13)。(ちなみに、ヒナゲシの実はもっと小さい。)

「激しいまでの幸せ」(9 行目)、荒々しい眠気 (11 行目) とは、アヘンのもたらす高揚感・陶酔感や、抗いがたい脱力感と眠気をあらわすのであろう。キスを求めてつき出されたくちびる (12 行目) というのは、ケシの実の上部の描



図版 13 乾燥したケシの実。

写である（「ジプシー」というたとえにおいて、この部分は結んだ髪にもなろうか）。そんなケシをめぐって、以降この詩でくり上げられる連想と思考を整理しよう。

(1) 若さと成長、あるいは古い

モニカがくれたケシを見て、この詩の「ぼく」は思い出す、花とそれが枯れてできる実が、つまり若いモニカ（このとき 11 歳）と成長した、あるいは枯れた大人であるトムソン（このとき 31 歳）が、いかに異なるかを。「彼と彼女の手のあいだにある」のは花ではなく、「20 年の枯れた月日」（16 行目）なのだ。「ぼく」は、アヘンとして通常眠りと忘却をもたらすケシがこのような知見をもたらすという逆説に、（やや大げさに）驚く（28-34 行目）。（実際にモニカからトムソンがもらったのはヒナゲシの花だが、詩のなかで、それは花であったり枯れた実であったりする。）

(2) 見かけと真実の違い

モニカのくれたケシは「みずからの熱で火がついたかのように、／端からしおれ」ていたが、そのなかには「まだ火がくすぶって」いた（26-27 行目）。「疲れはてたジプシー」（10 行目）のようなケシの実のなかに強力な麻薬成分があることの比喩である。見かけと真実は違うのだ。愛情と友情は違い、また人（モニカの両親）が話すような（詩人としての）「ぼく」も、本当の（かつてアヘン中毒の浮浪者であった）「ぼく」の姿ではない。若いモニカは、まだこのことを知らない（44-45 行目）。

(3) 内に秘めた夢

「眠りの花」、つまりケシは、「夢がつまって重い」（64-65 行目）。（2）と関連して、枯れたケシが現実離れした感覚や気分をもたらすことの比喩である。同様に、（1）で枯れたケシの実にたとえられた「ぼく」の頭が生むものも、ある種の夢、詩である（68-69 行目）。

(4) すべてのものは刈りとられる

ヒナゲシのまわりにある麦やヒナゲシ——その英語名のひとつ“corn poppy”が

示すように、この花は穀物畑によく生える——は、人間によって刈りとられる。人間も、いずれ時間によって刈りとられる。ありきたりであるが、この世に生まれたものはすべて滅びる。「かわいいモニカ、ぼくは時間の爪につかまる」(66-71, 77行目)。<sup>27</sup>

(5) 刈りとられて残るもの

刈りとられたものは本当に滅びるか。違う。麦は刈りとられてパンになる。枯れても、刈られても、ケシのなかには夢がある。麻薬成分がある(64-65行目)。「ぼく」が刈られたら？ スペンサー (Edmund Spenser, 1552-99) やシェイクスピアの定番ソネットを引くまでもないであろう。もちろん夢が残る、詩が残る。そして、その詩のなかに歌われるものとして、モニカと、モニカがくれたヒナゲシの花（あるいはケシ）が残るのである（73-80行目）。

以上のような連想・思考を解きほぐせないほどに凝縮し、この詩「ケシ」は終わる——「ぼくの枯れた、枯れた夢……」(80行目)。

「君のくれた枯れた夢の花は、／詩の本のなか、ずっと残る」(73-74行目)——これは、「捨てたらダメだから」というモニカの言葉に対するトムソンの返答であった。そしてその通りに彼は、彼女からもらったヒナゲシの花を、自分で清書した『詩集』の原稿にはさみ、死ぬまで捨てずにもっていた (Walsh 148; Meynell 341)。

おわりに

アヘンをめぐる19世紀イギリスの歴史はどのように書かれるべきか。本稿で参照してきたヴァージニア・ベリッジ (Virginia Berridge) らの研究のように、統計的にアヘンの流通経路やその量を示し、どの地域でどんな人々がどのようにアヘンを使用・濫用したか、それに対してどのような人々のあいだでどんな議論がなされ、どんな対策が講じられ、そしてどんな成果・改善が見られたか、などを世紀にわたってたどることはもちろん有益である。このような研究により、100



年あるいはそれ以上にわたるアヘンの使用・誤用・濫用、およびこれらへの対策の変遷が一望できる。

しかし、人文科学的な視点から見れば、このような研究には何か足りないものを感じる。描かれる絵が大きすぎて、そのなかの人間が見えないのである。ベリッジは、19 世紀イギリスのアヘンに対する人々の態度の変化は、許容から管理へ、というものであったと論じる。本当か？ 本当に 19 世紀のはじめにはアヘンの使用が全面的に許容されていたか？ ならば、なぜキーツはアヘン溶液に少し手を出したときに友人にとがめられ、二度と軽はずみな使用はしないと誓ったのか？ 結核の苦痛を抑えるための少量のアヘンが、なぜ彼には与えられなかったのか？<sup>28</sup> またベリッジは、19 世紀イギリスのアヘン管理政策は、医療・政治のエリートによる下層中毒者の管理を目指すもので、そこには階級の問題があったと論じる (Berridge xxviii ff. and *passim*.). ならば、商人の子エリザベス・シダルと大学教員の子ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの二人についてどう考えればよいか？ 医師の子ながら浮浪者に身を落したトムソンはどうか？ 彼らの麻薬使用歴に支配・被支配の問題を見るべきか？ 大きな歴史の流れ・社会変化の全体像を描く研究のなかで、これら個別の事例をすべて説明する必要はもちろんないが、本章で見てきた詩人たちがみなはみ出てしまうような絵は、やはり若干説得力に欠けるといわざるをえない。

かといって、以上の議論で採用した伝記や作品解釈という文学研究的・人文科学的な視点に立つほうがよい、そのほうがアヘンをめぐる 19 世紀イギリスの社会状況をより正しく理解できる、といたいわけではない。ただ、個人の生涯や、個人の思考が生み出すものとしての文学作品を詳しく見ることにより、当時の人間に対してアヘンがもっていた意味や、それがもたらした問題の大きさと重さが、より身に迫るかたちで理解できると考えるのである。全体を描く大きな絵は、細部の補足があれば、より説得力あるものとなるであろう。逆に細部の記述・論述も、全体像を織りなすデータや資料をとり入れることにより、より視野の広い、客観性の高いものとなるであろう。

キーツの死から約 200 年、トムソンの死から約 100 年。麻薬の危険性に対する意識が飛躍的に高まり、各国内で、また国際的に、麻薬の管理、その濫用の取り締まりがはかれている。が、現実は何の通りである。この矛盾は何を意味す

るか？ どうすれば解決できるのだろうか？

## 図版出典

- 1 (c) British Library Board, *Ashley MS 4165, f.v.*
- 2 <<http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Mort.jpg>>.
- 3 *Galerie* vol. 4, no. 238.
- 4 *Galerie* vol. 4, no. 238 (部分)。
- 5 (c) Lynne Fahey. <<http://www.flickr.com/photos/spiralz/28018731/>>.
- 6 National Museum of American History, Behring Center, Smithsonian Institution 所蔵。  
<[http://www.nlm.nih.gov/visibleproofs/galleries/exhibition/laboratory\\_image\\_3.html](http://www.nlm.nih.gov/visibleproofs/galleries/exhibition/laboratory_image_3.html)>.
- 7 (c) Tate, London 2012, N01279.
- 8 (c) Tate, London 2012, N01279 (部分)。
- 9 Michael Maggs 撮影。  
<[http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Field\\_poppy\\_\(Papaver\\_rhoeas\)\\_in\\_meadow.jpg](http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Field_poppy_(Papaver_rhoeas)_in_meadow.jpg)>.
- 10 Katherine M. C. Brégy, *The Poets' Chantry* (St. Louis: Herder, 1913) より。  
<<http://archive.org/details/poetschantry00bregiala>>.
- 11 Thompson, *Works* vol. 2 より。
- 12 <[http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Slaapbol\\_R0017601.JPG](http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Slaapbol_R0017601.JPG)>.
- 13 Zyance 撮影 (部分)。<[http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Mohn\\_z06.jpg](http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Mohn_z06.jpg)>.

## 注

- 1 シダルの伝記の総括として Marsh を紹介する。
- 2 Thompson, *Letters* 23; Walsh ch. 4; Meynell ch. 5; Taylor 8-9; Boardman 82ff.
- 3 麻薬単一条約(1961年)、向精神薬条約(1971年)、麻薬及び向精神薬の不正取引条約(1988年)(厚生労働省)。
- 4 以下、本稿で特にとりあげる詩三篇(キーツ「秋に」、ロセッティ「秋の歌」、トムソン「ケシ」)以外は、日本語訳のみ引用する。日本語訳はすべて筆者による。
- 5 ちなみに、1863-1910年における、アヘン溶液を含む麻薬による自殺者は、人口100万人中0.5-3名程度であった(Berridge 275)。
- 6 他にキーツの詩のテキストとして、Keats, *Complete* も参照。
- 7 イアン・ジャックは、この場面のヒナゲシにアヘンへの連想をあえて見ないが、前述のアヘンの日常性や、キーツの他の作品における表現からみて、これは誤りであろう(Jack 236-37)。医学博士ブライアン・リヴジーは、1819年3月19日、クリケットで目のまわりにけがをした翌日のキーツのようすから、その治療にアヘンが使われたことを推測する(Wolfson 241-42; Livesley 7-8)。なお、“To Autumn”に関するこれまでの研究は、Strachan 173-75で概観できる。
- 8 ジャックが論証しているように、18世紀以降、多くの絵画作品が大陸からイギリスに持ちこまれるようになってきていた。それらは貴族のギャラリーで見ることができ、またさらに広く、版画によるレプリカ集で見ることができた(Jack xvii-xxiii)。ここにあげたブーサンの絵は、当時の「ナポレオン美術館」(今のルーヴル美術館)の版画集から。*Garelie* 12の索引も参照(ブーサンの作品が多く確認できる)。Keats, *Complete* 699の注も参照のこと。
- 9 他にも、ヨブ記 21: 18, 詩篇 83: 13, イザヤ書 47: 4, エレミヤ書 13: 24なども参照のこと。

- ロセッティ「秋の歌」の第 2 スタンザにおける「刈られる魂」のイメージも、同系統のものである。
- 10 「丸々育った子羊」のような微妙な撞着語法が、キーツには少なくない。他の例として、「ナイティンゲールに歌うオード」の最終スタンザから、ナイティンゲールの歌を指す“plaintive anthem”「悲しみを歌う、賛美あるいはよろこびの歌」(75 行目) (*OED*, “anthem” 3 参照) をあげる。この詩のなかで、ナイティンゲールの歌のとらえ方が変化していることを示す重要な表現である。
  - 11 もともとこの詩は第 1 および第 3 の二スタンザ構成で、第 2 スタンザは後から加えられたもの、という考え方もある (Keats, *Poems* 652, *Complete* 698)。
  - 12 ジャックが推測して曰く、「秋に」を書きながらキーツは、もう次の秋は来ないかもしれない、と考えていた (Jack 234)。推測なので、特に支持・不支持はない。ちなみにキーツがソネット「死ぬかもしれないと恐れるとき」(“When I have fears,” Jan. 1818) を書いたのは、結核を病む前であり、また弟トムが結核で死ぬ前でもあった。
  - 13 このテキストは、大英図書館のアシュリー文庫の手稿からのものである。
  - 14 この段落の記述は McGann; Fredeman 1: xxvii による。
  - 15 年齢別に見ると、1870 年代半ばまでのアヘン溶液による死者数は、0-4 歳が圧倒的に多く、僅差で 35 歳以上がつづく (Berridge 276)。
  - 16 1860 年 4 月、シダルは、「食べたものを 5 分も胃の中に入れておけない。ソーダ水でさえも。こんな感じで栄養がまったくとれていない状態が長い間つづいてる」とロセッティが心配する状態であった (Fredeman 2: 292-93)。
  - 17 マーシュは、シダルは、病気のため薬としてアヘンが必要だったのではなく、たんにアヘンに依存していただけではないか、という (Marsh 63)。
  - 18 ロセッティの姪 (弟ウィリアムの子) もそう考えた (Angeli ch. 19)。彼女がシダルの死を自殺と考える根拠は、家族に伝わる言い伝えであり、決定的とはいえない。その他諸説については Marsh および Fredeman 5: 398-400 を参照。
  - 19 飲みすぎのための薬としてアヘンを飲みすぎた、という別の事例にふれた直後に、ベリッジがシダルの死を自殺と断定しているのは奇異である (Berridge 80)。
  - 20 「シダルの死をとりかえしのつかない悲劇ととらえたのはロセッティだけ」という見方もある (Marsh 129)。シダルとの結婚はロセッティにとって不幸だった、と考える親族や知人が少なからずいた、ということである。なお、シダルの死以上にロセッティの心を苛んだのは、悪い恋人・夫であったという懺悔の念をこめて彼女とともに埋葬したみずからの詩集の原稿を、1869 年に彼女の遺体とともに発掘して出版してしまったことであった (Rossetti, W. 1: 224-25; Fredeman 4: 139-41, 5: 379-89; Marsh 3-4, 20-23)。
  - 21 この絵に散りばめられた象徴については、ロセッティ・アーカイヴに各種コメントがある (Rossetti, D. “Beata”)。この絵についてマーシュは、「不気味なイメージでもある——愛する女性の死の瞬間をロセッティ中期の官能スタイルで描いているわけで、ネクロフィーリア [死体愛好症] 的な……」と書くが、どうして芸術家を常人の理解を超えた存在にしたがるのか、理解に苦しむ (マーシュ 142)。なお、ロセッティの弟ウィリアム曰く、死んだシダルはとても美しくおだやかで、ロセッティは彼女の死を信じず、確認のために再度医者を呼ぶよう訴えていた (Rossetti, W. 1: 224)。
  - 22 1870-77 年、トムソンはダラム大学のアショー・カレッジ (別名セント・カスパーツ・カレッジ [Ushaw/St Cuthbert's College]) に在籍。1863-67 年にはラフカディオ・ハーンもここで学んでいた。
  - 23 トムソンはただのゴロツキではなかった。最初の学校では、空き時間にひたすら図書館で詩を読み韻律を学び、医学生時代には学校に行かずに美術館に通いつめ、浮浪者時代にも、ただ屋根を求めて来ていた同業者たちとともに出入り禁止になるまでロンドンのギルドホール図書館で本を読みふけり、さらにナショナル・ギャラリーにも通い、ロセッティの「見よ、われは主のはした女なり (受胎告知)」(“Ecce Ancilla Domini!”) に感動したりもしていた (Meynell 27, 37, 63, 91; Walsh chs. 1-3)。
  - 24 知人たちによれば、トムソンはつまらない話をくり返したというが、彼を間近で見ていたメイネル家の子のひとりエヴァレード曰く、それはたいていアヘンが切れていた

- ときであった。つまり、つまらないことをいいながら、「彼は心のなかで『アヘン溶液はどこだ?』と叫んでいた」のである (Meynell 342; cf. Walsh 196)。
- 25 Thompson, *Real* の集計による。編者コノリーが記すように、多くの書評・エッセイには署名がないので、若干の誤差があるだろう。
- 26 さらに、キーツと同様、消化器系の疾患でも苦しんでいた (Walsh 212)。なお、トムソンの場合、結核ではなく、病院でアヘンをやめさせられたことが死につながったと考える人が多かった (Walsh 219)。
- 27 シェリーの「西風に歌うオード」中のフレーズ、“I fall upon the thorns of life!” (54 行目) を想起させる一行。
- 28 このようなことを考えるには、フォクスクロフトの議論のように「恥」、「後ろめたさ」など、集団内における個人の感情を視野に入れなくてはならないであろう (Foxcroft ch. 3)。

## 引用文献

- Angeli, Helen Rossetti. *Dante Gabriel Rossetti: His Friends and Enemies*. London: Hamilton, 1949.
- Bate, Walter Jackson. *John Keats*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1963.
- Beeton, Isabella. *The Book of Household Management*. London, 1868. *Internet Archive*. 25 Dec. 2012 <<http://archive.org/details/bookhouseholdma00beetgoog>>.
- Berridge, Virginia, and Griffith Edwards. *Opium and the People: Opiate Use in Nineteenth-Century England*. New Haven: Yale UP, 1987.
- Bloom, Harold. Introduction. *The Odes of Keats*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House, 1987. 1-23.
- Boardman, Brigid. *Between Heaven and Charing Cross*. New Haven: Yale UP, 1988.
- Brown, Charles Armitage. *Life of John Keats*. Ed. Dorothy Hyde Bodurtha and Willard Bissell Pope. London: Oxford UP, 1937.
- “Case of ‘Delirium Tremens’, in Which Large Doses of Opium Were Exhibited without Producing Any Sensible Effect.” *Lancet* 12 (1826-27): 636. *Google Books*. 25 Dec. 2012 <<http://books.google.co.jp/books?id=cbhMAQAIAAJ>>.
- Clarke, James. “Report from the General Hospital near Nottingham.” *Edinburgh Medical and Surgical J* 4 (1808): 265-85. *Internet Archive*. 25 Dec. 2012 <<http://archive.org/details/edinburghmedical04edinuoft>>.
- Combe, George. *The Constitution of Man*. Hartford, 1850. *Google Books*. 18 Dec. 2012 <<http://books.google.co.jp/books?id=XIJ0AAAYAAJ>>.
- Everest, Kelvin. “Keats, John (1795–1821).” *Oxford Dictionary of National Biography*. Oxford: Oxford UP, 2004.
- Foxcroft, Louise. *The Making of Addiction: The “Use and Abuse” of Opium in Nineteenth-Century Britain*. Aldershot: Ashgate, 2007.
- Fredeman, William, ed. *The Correspondence of Dante Gabriel Rossetti*. 5 vols. Cambridge: Brewer, 2002.
- Galerie du Musée Napoléon*. 12 Vols. Paris, 1807 (vol. 4), 1815 (vol. 12). 25. Dec 2012 <<http://archive.org/details/galeriedumusena03louvgoog>> (vol. 4); <<http://archive.org/details/galeriedumusena04caragoo>> (vol. 12).
- Hayter, Alethea. *Opium and the Romantic Imagination*. London: Faber, 1968.
- Inman, Thomas. *Foundation for a New Theory and Practice of Medicine*. 2nd ed. London, 1861. *Google Books*. 18 Dec. 2012 <<http://books.google.co.jp/books?id=S0kYAAAAAYAAJ>>.
- Jackson, Matthew. “Case of Delirium Tremens.” *Lancet* (1827-8) 2: 827. *Internet Archive*. 18 Dec. 2012 <<http://archive.org/details/lancetmed1828wakl>>.
- Jack, Ian. *Keats and the Mirror of Art*. Oxford: Clarendon, 1967.

- Keats, John. *The Complete Poems*. Ed. John Barnard. London: Penguin, 2006.
- . *The Poems of John Keats*. Ed. Miriam Allott. Harlow: Longman, 1970.
- . *Poems Published in 1820*. Ed. M. Robertson. Oxford: Clarendon, 1909.
- Livesley, Brian. *The Dying Keats: A Case for Euthanasia?* Leicester: Matador, 2009.
- Macht, David, and Nellie Gessford. "The Unfortunate Drug Experiences of Dante Gabriel Rossetti." *Bulletin of the Institute of the History of Medicine* 6 (1938): 34-61.
- McGann, Jerome J. "An Introduction to D. G. Rossetti." *Nines: Nineteenth-Century Scholarship Online*. 11 December 2011 <<http://www.nines.org/exhibits/rossettibio>>.
- Marsh, Jan. *The Legend of Elizabeth Siddal*. London: Quartet, 1989.
- Meynell, Everard. *The Life of Francis Thompson*. New York: Charles Scribner's Sons, 1913.
- "Professor Alfred S. Taylor's Report on Poisoning, and the Dispensing, Vending, and Keeping of Poisons." *Pharmaceutical J and Transactions*, 2nd ser. 6 (1864-65): 172-84. *Google Books*. 25 Dec. 2012. <<http://books.google.co.jp/books?id=F6M8AAAAcAAJ>>.
- Report of the Commissioner Appointed to Inquire into the Condition of the Frame-Work Knitters. The Sessional Papers Printed by Order of the House of Lords*. Vol. 23. London, 1845. *Google Books*. 25 Dec. 2012 <<http://books.google.co.jp/books?id=HRRcAAAAQAAJ>>.
- Rollins, Hyder Edward, ed. *The Keats Circle*. 2nd ed. 2 vols. Cambridge, MA: Harvard UP, 1965.
- Rossetti, Dante Gabriel. "Autumn Song." Rossetti, D., *Complete*. 9 Dec. 2012 <<http://www.rossettiarchive.org/img/ashleyB1417c.jpg>>.
- . "Beata Beatrix." Rossetti, D., *Complete*. 21 Dec. 2012 <<http://www.rossettiarchive.org/docs/sl68.raw.html>>.
- . *The Complete Writings and Pictures of Dante Gabriel Rossetti: A Hypermedia Archive*. Ed. Jerome J. McGann. <<http://www.rossettiarchive.org>>.
- Rossetti, William. *Dante Gabriel Rossetti: His Family Letters*. 2 vols. London, 1895. *Internet Archive*. 25 Dec. 2012 <<http://archive.org/details/dantegabrielross01rossuoft>> (vol. 1); <<http://archive.org/details/dantegabrielross02ross>> (vol. 2).
- Sharp, William, ed. *The Life and Letters of Joseph Severn*. London, 1892. *Internet Archive*. 25 Dec. 1012 <<http://archive.org/details/lifelettersofjos00shar>>.
- Strachan, John. *A Routledge Literary Sourcebook on the Poems of John Keats*. London: Routledge, 2003.
- Taylor, Beverly. *Francis Thompson*. Boston: Twayne, 1987.
- Thompson, Francis. *The Letters of Francis Thompson*. Ed. John Evangelist Walsh. New York: Hawthorn, 1969.
- . *Poems*. London, 1893. *Internet Archive*. 25 Dec. 2012 <<http://archive.org/details/poemsthomrich>>.
- . *The Real Robert Louis Stevenson and Other Critical Essays*. Ed. Terence L. Connolly. New York: Boston College, 1959.
- . *The Works of Francis Thompson*. Ed. W[ilfrid] M[eynell]. 3 vols. London: Burns, 1913.
- Walsh, John. *Strange Harp, Strange Symphony: The Life of Francis Thompson*. New York: Hawthorn, 1967.
- Wolfson, Susan, ed. *John Keats*. New York: Longman, 2007.
- 厚生労働省「麻薬3条約」26 Dec. 2012 <<http://www.mhlw.go.jp/bunya/iyakuhiin/yakubuturanyou/kanren-tuchi/mayaku-3jouyaku.html>>.
- マーシュ、ジャン『ラファエル前派画集「女」』河村錠一郎訳 リプロボート、1990年。